

人生と永遠についてのクリスチャンの基本的な心構え 第一ペテロ 1 章 17-21 節

(ペテロの手紙・シリーズ #31) ロバート・D・ルギンビル博士著

<https://ichthys.com/Pet31.htm>

からの翻訳

第一ペテロ 1 章 17-21 節

(17) それで、もしあなたがたが、すべての人の行いを分け隔てなく評価される方を父と呼び求めているのなら[そして、あなたがたは確かにそうしているのですから]、この地上で[一時的に]寄留している残りの時を、[神を敬う]恐れをもって過ごすことを[習慣と]しなさい。(18) あなたがたが先祖から受け継いだむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちるものによったのではなく、(19) 傷も汚れもない小羊のような尊い血、すなわちキリスト[・イエス]の[血]によったことを、あなたがたは知っているからです。(20) [その来臨は]世界の創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために(すなわち、あなたがたの救いのために)[肉において]現れました。(21) あなたがたは、この方を通して、キリストを死者の中からよみがえらせ、栄光をお与えになった神を信じる者となったのであり、その結果、あなたがたの信仰と希望は神に置かれているのです。(第一ペテロ 1 章 17-21 節)

この箇所についてまず注目すべきことは、これが [14-16 節](#)におけるペテロの聖化についての話の結論となっていることです。すべての信者は、天の父の聖さにふさわしく歩む必要があるため、罪と肉の欲を避けなければならないという点を述べた後、ペテロはその点をもう一度述べ([17 節](#))、さらに、クリスチャンとしての歩みにおいて私たちの証しを汚すことに対する神からの懲らしめへの恐れに加えて、そうすべき動機となる理由を示しています。その理由とは、クリスチャンが持つべきあらゆる見方の中で最も重要なものであり、キリストに属するすべての者が、いつでも絶えず、しっかりと心に留めておくべきもの、すなわち、**十字架**です。私たちのすべての罪を洗い清めるために、愛する主と天の父がどれほどの代価を払われたのかを悟るなら、まるで罪など大したことではないかのように、さらに罪にふけることは、本質的に、カルバリ山の暗闇の中で私たちの罪のために死なれたイエスが私たちのためにしてくださったことを、故意に無視することなのです。

しかし、これらのもの[[5-7 節の徳](#)]を持たない者は、近視であり、さらには盲

目であって、自分の以前の罪が清められたことを忘れているのです。(第二ペテロ 1 章 9 節)

簡単に言えば、上の段落は、この世を、そして特にこの世における私たちの行いを見るうえで有益かつ極めて重要な視点を私たちに与えるためのものです。私たちがするすべてのことは、良いことであれ悪いことであれ、また、私たちがすべきなのにしなかったすべてのことも、キリストの血を基準として測られなければなりません。キリストが私たちのために払ってくださった計り知れない犠牲を心に留めていればいるほど、罪によってその犠牲を汚すことは少なくなり、日々の歩みにおいてキリストに積極的に応答し、十字架において示されたイエスの私たちに対する計り知れない愛に応えて、成長し、前進し、実を結ぶようになります。十字架が人類の歴史を二つに分けるように、また、不信仰から救いへと、私たちの人生を二つに分けるように、十字架はまた、最も鋭い剣のように私たちの心と思いを切り分けます。なぜなら、十字架は、他のすべての真理がその上に据えられている根本的な真理だからです。

(12) 神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭く、霊とその地上の命とを分け、骨と骨髓とを分けるところまで刺し通し、[なぜなら]それ(すなわち、私たちの良心の内に宿る御言葉)は、心の思いと感情とをさばくものだからである。(13) また、神のみまえには、隠れた被造物は一つもなく、すべてのものは、わたしたちがかかわりを持つたの目には、裸であり、あらわにされている。(ヘブル 4 章 12-13 節)

父を呼び求めること:

信者は、毎日、私たちの天の父を呼び求めます——あるいは、少なくともそうすべきです。私たちは主の祈りを唱える時にそうしますし、おそらく、一日のうちに罪を告白する時や、それ以外に祈る時にもいつもそうしているでしょう。それはまったく正しいことです。神は私たちの天の父であり、私たちはキリストにあって神の子供たちだからです。神は、私たちが助けを求める時には聞いてくださると約束しておられます(ルカ 11 章 5-13 節)。そして私たちは、必要がある時にはいつでも神を呼び求めます——あるいは、少なくともそうすべきです。ここでペテロは、救われた後もなお、私たちがどれほど神を必要としているかを思い起こさせ、そこから当然の結論を引き出すよう促しています。もし私たちが神の助けと赦しを必要としているのなら(そして、確かに必要としているのですが)、神を不快にさせるような悪い生き方を常習的に続けることに身を任せようなどと考えること自体、なんと間違った考え方でしょうか。それこそ、ペテロが別の箇所で言っている「霊的な近視」(第二ペテロ 1 章 9 節)であり、しかも非常に危険なことで

す。霊的成長と、そこから生じる聖められた行いとが相まって、私たちが神に近づけ、私たちの祈りを力あるものにする一方で([詩篇 34 篇 17 節](#); [箴言 15 章 29 節](#); [第一ペテロ 3 章 12 節](#))、その反対の行いが、当然ながら反対の結果をもたらすことは言うまでもありません([第一ペテロ 3 章 7 節](#))。したがって、聖化を正しい観点から見るためには、キリストが、私たちがキリストにあって持っている赦しを備えるために何をしてくださったのかを覚えておく必要があります(罪の告白という恵みを濫用しないためです)。それと同時に、私たちが聖められた生き方をしていない場合に、何が起こる可能性があるのかも覚えておかねばなりません。すなわち、罪の告白と真の悔い改め(つまり、自分がふけてきた罪を抱き続けるのではなく、それに背を向けること)の後に、必要な時にいと高き方からの時宜にかなった助けが確かに与えられ、呪いは祝福へと変えられるでしょう。そしてそれとともに、その正しい見方を取り戻し、それを保つために必要な、父としての神の懲らしめも、間違いなく与えられるでしょう。

懲らしめは、その受けている間は喜ばしいものではなく、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって訓練された者に、[個人的な]義という、人を健全で完全なものとする実を結ばせるのである。([ヘブル 12 章 11 節](#))

すべての人の行いを分け隔てなく評価される方：

イエス・キリストを信じる者として、私たちが大きな白い御座の裁きにおいて、神の法廷の前に立つことはありません。私たちは救われており、したがって、罪に定める最後の裁きを受けることはないからです。

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は、神のひとり子の御名(すなわち、その方ご自身)を信じなかったので、すでにさばかれている。([ヨハネ 3 章 18 節](#))

しかし、信者に関係する裁きはほかにあり、ここでペテロが言及しているのはそれらです。それらを時間的に後のものから順に見ていくと、まず私たちは皆、イエス・キリストの裁きの座の前で評価を受けることになります。

なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立たなければならず、それぞれが、このからだを通して行ったことについて、それが良いことであれ、価値のないことであれ、その報いを受けることになるからである。([第二コリント 5 章 10 節](#))

この教会に対する裁きは、永遠の報いが与えられることに關するものですが、同時に、私たちの主による私たちの生涯の評価も伴います。このことは、主とともに一歩一歩歩んでいく際に、心に留めておくべきことです。

それゆえ、主を恐れるとはどういうことか(すなわち、この裁きを予期すること)を知っているのです、わたしたちはすべての人を[良い競走を走るように]説得しようとしている。(第二コリント 5 章 11 節前半)

ここで<第一ペテロ 1 章 17 節>ペテロが、今この地上における私たちの行いを評価される方として父に言及していることも、ヨハネの福音書にある次の言葉とまったく矛盾しません。

(22) 父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられた。(23) それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。(ヨハネ 5 章 22-23 節前半)

三位一体の神が一つであられること、そしてそれは、あらゆる点において完全で、少しの隔たりもない一致と目的の一体性を持っておられるというのは、言うまでもありません(これは人間には十分に理解することさえできないものです)。したがって、父がどのような「裁き」を下されるとしても、子も同じ裁きを下されます——そして実際にそうなします。上に引用した聖句で私たちの主が語っておられるように、裁きを正式に子に委ねる目的は、「すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うため」です。これは非常に重要な目的でした。というのも、特に主の世代の人々は、概して主を少しも敬おうとしなかったからです。ご自身の血によって私たちを買い取ってくださった私たちの主イエス・キリストと一つにされた神の子らとして、私たちには父を呼び求める権利があります(ローマ 8 章 15 節; ガラテヤ 4 章 6 節)。そして第一ペテロ 1 章 17 節のこの言葉によって、ペテロは、私たちが父を呼び求める時、私たちの行いに対する父の評価は完全に公平で正しいものであることを保証しています——それは、私たちの主がこの世における私たちの行いを評価される場合とまったく同じです。この二つの評価の間には、ほんのわずかな違いはありません。父は御子をメシヤ、キリスト、油注がれた方として任命されたので、裁きに関して、御子はその權威を父から直接受けておられることを明確にしておくことは重要でした。

そこでイエスは彼らのところに来て言われた、「わたしには、天においても地においても、いっさいの權威が与えられている。」(マタイ 28 章 18 節)

ですから、私たちを直接さばかれるのはイエスですが、ペテロがこの原則をこのような形で述べていることによって、父の裁きと子の裁きとの間に何らかの違いがあるかもしれないという誤った考えをあらかじめ退けています。私たちが父に対して抱く敬虔な恐れと敬意は、子に対しても同じであるべきです。なぜなら、すべての権威は父から、人性を持たれた御子へと与えられているからです。しかし、個々の裁きについて言えば、三位一体の神は常に完全に一つの御心を持っておられます。それは、今この時に私たちを評価される場合であれ、来たるべきあの大きな日に私たちがキリストの裁きの座の前に立つ場合であれ、同じです。

[この評価([ローマ 2 章 11-15 節](#))は]神が、わたしの福音によって、イエス・キリストを通して人々の隠れた事柄をさばかれる日に[行われる]。([ローマ 2 章 16 節](#))

ここでこのように述べられているのは、私たちの目をこの世のことから天におられる神へと向け、私たちがこの世で何を見、何を聞き、何を感じるかよりも、私たちが考え、語り、行うことを、天の御座におられる父なる神がどのように受け止め、評価しておられるかのほうが、はるかに重要であることを思い起こさせるためです。もし私たちが、ほんのわずかな時間でも、父と子の御前にいる天の大群衆が地上を見下ろし、私たち信者のすることすべてを完全に理解し、評価しながら見守っている光景を目にすることができたなら、私たちは、聖められた行いという点においても、また、私たちの最優先事項であるべき、霊的な戦いにおける成長、前進、実を結ぶことのために一瞬一瞬を有効に用いるという点においても、狭くまっすぐな道を歩もうという思いを、さらに強く持つことでしょう。人は誰でも、見ている人がいる時には振る舞いが変わるものです。そして、私たちの行いを評価される方々が完全な審判者であるなら、なおさら私たちは最善を尽くそうとするでしょう。

このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられる。([コロサイ 3 章 1 節](#) /NIV 訳)

この地上で[一時的に]寄留している残りの時を、[神を敬う]恐れをもって過ごしなさい:

(4) 主よ、わたしの終わりと、わたしの日の数とを知らせ、わたしの命がいかに
はかないものであるかを、わたしに知らせてください。(5) あなたはわたしの日
を、わずか手の幅ほどにされました。わたしの一生は、あなたの前では無に等し

いのです。まことに、人の命はみな、ただ一息にすぎません。セラ。(6) まことに、人は影のように行き来するにすぎません。彼はあくせくしますが、それもただむなしいだけです。富を積み上げても、だれがそれを手にするのか知りません。(詩篇 39 章 4-6 節 NIV) (詩篇 89 章 47 節参照)

もし私たちが皆、神にお会いするまでの待ち時間がどれほど短いかを、日々、一步一步、実際に神に「示して」いただくようにしているなら(ヘブル 10 章 37 節; 詩篇 42 章 2 節参照)、永遠という栄光の光の中でこの短い人生を生きる私たちは、この世で過ごす日々のことをほとんど気にかけなくなるでしょう(伝道の書 5 章 20 節)。ペテロは先に、私たちはいつも見られているということ(そして私たちは皆、見られている時のほうがよりよく行動するということ)を思い起こさせましたが、ここでは今度は、私たちがこの地上にいるのは実にごく短い間にすぎないことを思い起こさせています(ローマ 13 章 11 節; ピリピ 4 章 5 節; ヤコブ 5 章 8 節; 第一ペテロ 4 章 7 節; 黙示録 1 章 3 節; 22 章 10 節; ルカ 21 章 8 節参照)。愛する主イエスとともに過ごす永遠の無限の長さ比べれば、なおさらそうです。そうであるなら、あらゆることにおいて「主を待ち望む」ほうが、どれほどよいことでしょうか。特に、一方では自分に必要だと思うものが与えられていないと感じている時、また他方では不必要で有害なものにふけりたいという誘惑を受けている時には、なおさらです。したがって、この世と、それが最終的にもたらす失望に心を奪われるよりも、間もなく現される希望にしっかりと目を向け(第一ペテロ 1 章 13 節)、それまでの間、主が私たちに与えてくださった機会を最大限に生かして良い実を結び、主の再臨の時に良い報いを受けるようにするほうが、はるかによいのです(エペソ 5 章 16 節; コロサイ 4 章 5 節)。

これは主が造られた日(すなわち、第二の来臨の日)である！ われらはこの日を喜び楽しもう！(詩篇 118 章 24 節)

それゆえ、わたしの兄弟たちよ、あなたがたがいつも[真理に]従順であったように、わたしが[あなたがたと]一緒にいた時だけでなく、わたしのいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いのために励みなさい。(ピリピ 2 章 12 節)

先祖から受け継いだむなしい生き方：

「なんというむなしさ！ なんというむなしさ！」と伝道者は言う、「すべてはむなしい！」(伝道の書 1 章 2 節)

ペテロは、この巡回書簡を受け取ることになる異邦人たちが以前行っていた異教の

慣習について特に述べていますが、神の御言葉の真理から切り離された伝統は、モーセの律法を律法主義的に守ることも含めて、すべてまったく無益でむなしいものです。すべての人は死に、日の下での私たちのむなしい努力によって得られたものを、結局だれが受け取ることになるのかさえ確かではないのですから、人間の努力は無意味です([詩篇 39 篇 6 節](#); [伝道の書 2 章 17-19 節](#))。この世の生涯において、肉の力によって私たちが何を行い、何を成し遂げたとしても、それは私たち自身と同じようにはかなく消え去るものです([ガラテヤ 6 章 8 節](#))。昔からある賛美歌にあるように、まさに「人生はただ一度、やがて過ぎ去る。キリストのためになされたことだけが残る」のです。この世における人間の努力が完全に無意味であること——人類の始まり以来のすべての人間の努力を合わせても、ただ一人をも滅びから救うことはできません——と、私たち信者がキリストの血によって得ている、値をつけることのできないほど尊い贖いとを比較することによって、ペテロはこの点を強く心に刻ませています。すなわち、これらの本質的な霊的現実を理解するなら、私たちの思いと努力は、一時的なもの、やがて完全に消え去るものではなく、永遠のもの、いつまでも残るものに向けられるべきなのです。

人が富を得るとき、その家の栄華が増し加わるときにも、恐れてはならない。彼は死ぬとき、何一つ携えて行くことができず、その栄華も彼とともに下って行くことはないからである。([詩篇 49 章 16-17 節](#) NIV 訳)

あなたがたは、虫とさびとが食い尽くし、盗人が掘り入って盗み出す地上に、自分のために宝を蓄えてはならない。むしろ、虫もさびも食い尽くさず、盗人も掘り入って盗み出すことのない天に、自分のために宝を蓄えなさい。あなたの宝のあるところには、あなたの心もあるからである。([マタイ 6 章 19-21 節](#))

朽ちるものによってではなく……キリストの尊い血によって贖われた：

私たちの主イエス・キリストがカルバリの十字架の暗闇の中で、私たちのすべての罪のために死ぬことによってなしてくださったことは、どれほど高く評価しても評価しすぎることはありません。それは、考え得るどのような宇宙よりも壮大であり、歴史の初めから終わりに至るまで、人間と天使が想像し得るすべてをはるかに超えて素晴らしいものです。神は(神でありながら)人となられ、私たちと運命を共にし、真に私たちの一人としてこの世を歩み、人間の理解を超える苦しみを受けられました——そして、すべての人間の罪が贖われるまで、十字架の暗闇の中で燃え上がる炎のような裁きの苦しみを受けられたのです。愛する主イエスの犠牲を土台とすることなしには、この人生、この世、そしてその中における私たちの立場について、クリスチャンが完全な、いや正しい

見方を持つことさえできません。私たちがなすべきように主のために生きるためには、主が私たちのためにしてくださったことの真価を正しく理解する必要があります。¹ 金、銀、宝石、金銭、その他あらゆる貴重品は、この卑しく一時的な人生においては価値があるかもしれませんが、全世界の富をすべて合わせても、人間のたった一つの罪の代価を支払うことさえできず、それどころか、そのようなもので支払おうとすること自体が神に対する侮辱となるでしょう。罪の支配のもとから買い取られ、「贖われる」ためには、ただ一人を除いて、いかなる人間にも支払うことのできない尊い代価が必要でした——そのただ一人とは、私たちの主イエス・キリストです。そして主は実際にその代価を支払い、十字架の上で、ご自身の人間としてのからだに全人類の罪を負ってくださいました。それこそが、私たち信者が罪の奴隷状態から買い取られ、永遠の命へと解放されるために支払われた唯一の贖いの代価、すなわち、私たちの唯一の救い主キリスト・イエスの血なのです。²

ですから、本当の負債は主に対して負っていたものであり、それを私たちのために支払ってくださったのも主であることを、私たちは認識する必要があります。

ですから、この世のものは私たちを救うことができないということ覚え、救われた後は、それらに心を向けるべきではありません。

ですから、私たちがなすべきように主のために生きるためには、イエスが私たちのためにしてくださったことの真価を理解する必要があります。それが、この箇所から実生活に適用すべき主要な教訓です。私たちが罪と死から解放されたのは、主の血によるもの、すなわち、私たちのすべての罪のために裁かれることによって、十字架上で私たちのために霊的な死を遂げてくださったことによるものです。この世の朽ち果てる宝は、間もなく完全に排除かれてしまうというのに、そのようなものに心を奪われることは、なんと間違ったことでしょうか。実際には、私たちは、キリストがご自身の命を代価として買い取ってくださった、死と裁きからの救いにこそ心を向けるべきなのです。

(6) キリストは、わたしたちがまだ無力であった時に、わたしたちのために死なただけではなく、まさに定められた時に、不敬虔な者であったわたしたちのために[死んで]くださったのである。(7) 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善い人のためなら、あるいは死をも恐れずに身を投げ出す者

¹ 『聖書の基礎 第4部 A「キリスト論」』II.5「キリストの霊的な死」<リンク先ファイルの 228 頁-/A4 版印刷本の 226 頁->を参照してください。

² 『聖書の基礎 第4部 A「キリスト論」』II.7「贖い」<リンク先ファイルの 253 頁-を参照下さい/ A4 版印刷本の 251 頁->を参照してください。

がいるかもしれない。(8) しかし、わたしたちがまだ罪人であった時に、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによって、神はわたしたちに対するご自身の愛を示しておられるのである。(ローマ 5 章 6-8 節)

傷も汚れもない小羊：

この呼び名は、私たちの主が人として完全であられたことを強調しています。主は罪の性質を持たずに生まれ(処女降誕が必要であった理由はそこにあります。すなわち、遺伝的に受け継がれるその罪の性質が伝わるのを避けるためです)、完全に罪のない生涯を送られました——世界の歴史上、そのような生涯を送った唯一の方です(ほかに、それに少しでも近づいた者さえ一人もいません)。そのため、イエスは私たちの罪を負う資格を持つ方であられました。律法が、いけにえとなる小羊に外面的な完全さを要求したのと同じように、私たちの主、神の小羊は内面的に完全であられ、それゆえ、十字架の暗闇の中でこの世の罪をご自身のからだに負い、私たちに代わって裁きを受ける資格を持っておられたのです(第一ペテロ 2 章 24 節; 第二コリント 5 章 21 節参照)。

その翌日、[ヨハネは]イエスが自分のところに来られるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊！」(ヨハネ 1 章 29 節 /NASB 訳)(ヨハネ 1 章 36 節参照)

[その来臨が]世界の創造の前からあらかじめ知られていた方：

ペテロがこの言葉を付け加えているのは、神の計画全体、救い、そして歴史のすべてがその上に据えられている土台である十字架が、偶然に起こったことでも、後から考え出されたことでもなく、神が創造を定められる以前から、これから起こるすべてのことにとって不可欠かつ根本的なものであったことを、私たちに思い起こさせるためです。この言葉は、神が創造を開始されるためには、それに先立って、イエス・キリストという尊い犠牲をささげることが定められている必要があったことを明らかにしています。それこそが、被造物に自由意志を与えながら、それでもなお最終的に神とともに永遠に生きることを可能にする唯一の手段だったからです(なぜなら「すべての人は罪を犯した」からです; [ローマ 3 章 23 節](#))。このことを心に留めておくことは、すべてのクリスチャンが神の真の目的と計画を見失わないために不可欠です——そして、その計画の要であり土台であるのが、イエス・キリストと十字架におけるその御業なのです。

しかし今、[キリストは]もろもろの時代が一つに合流する時に、ご自身をいけ

にえとしてささげることによって罪を取り除くため、ただ一度現れたのである。
([ヘブル 9 章 26 節](#)後半)

あなたがたのために、終わりの時に[肉において]現れた方：

イエスがこの世に来られたのは、私たちのためでした。その来臨は、あらゆる意味で犠牲を伴うものでした。神は何一つ必要とされません。そして、神が真の人性を取られること自体、計り知れない犠牲でした——それがどれほどのものであったかを、天に行く前の今の私たちが完全に理解することはできません。しかし、栄光を受けた状態ではなくこの世に来られ、地上での生涯を通して「罪人たちからご自身に向けられたこれほどの反抗」に耐え([ヘブル 12 章 3 節](#))、この世がかつて経験したことのないほど激しいサタンの妨害に直面しながら、あらゆる奉仕の中でも最も偉大な奉仕を成し遂げ(たとえば、[マタイ 4 章 1-11 節](#))、十字架にたどり着いて十字架につけられるまでに、七つの人間による裁判という難関をくぐり抜け([「聖書の基礎第 4 部 A」の「キリストの七つの裁判」](#)<リンク先ファイルの 139 頁-を参照下さい>の項を参照)——そしてその後、暗闇の中でこの世の罪のために裁かれ、あの木の上で、すべての罪をご自身のからだに負われたのです([第一ペテロ 2 章 24 節](#))……。言うまでもなく、私たちのためにこれほどの苦しみを受けてくださった愛する主イエスに対して、また、私たちが救われるために御子を死に渡してくださった父に対して、私たちが示すべき感謝には限りがありません。もし主が私たちに、聖められた生活を送り、主を知り、主とともに歩み、そして兄弟姉妹も同じようにできるよう助けたいと願う心を求めておられるのなら、それは本当に、主が私たちに求めるには多すぎることでしょいか？

この方を通して神を信じる者である[あなたがた]：

この人生は、すべて自由意志による選択にかかわるものです。そして、神のかたちを持ついかなる被造物にとっても、これまでになす、最も重要な選択は、神の権威を受け入れるかどうかということです。十字架以後のすべての人間にとって、この選択の唯一の対象は、この世の罪のために十字架で死なれた、啓示された方であるイエス・キリストです。私たちの救い主、そのご人格と御業を受け入れることができるのは、救いのために主に信仰を置くことによってのみです。それが、私たちが神を選び、この世とその邪悪な支配者を退ける方法です。キリストを私たちの救い主として受け入れることによって、私たちは父なる神の権威を受け入れていることを示します。ここでギリシヤ語に用いられている現在時制の分詞 *pisteuontas* (ピステウオンタス)、「[現在]信じている者たち」は、新約聖書において「信者」という概念を表す最も一般的な方法です。分詞に常に含まれている動詞的な意味は、現在行われており、そして継続している行為を

表しています。イエス・キリストに信仰を置いた者として、私たちは「主を継続して信じている状態」にあり、キリストとのこの信仰の関係に入ったことによって、父との永遠の関係も与えられています。すなわち、「この方を通して」、私たちはまた「父なる神を信じる者」でもあるのです([使徒行伝 16 章 34 節](#); [ローマ 4 章 24 節](#)参照)。

イエスは答えて言われた、「神のわざとは、神がつかわされた者を信じることである。」([ヨハネ 6 章 29 節](#) /NIV 訳)

そこでイエスは声をあげて言われた、「わたしを信じる者は、ただわたしを信じるのではなく、わたしをつかわされた方を信じるのである。」([ヨハネ 12 章 44 節](#) /NIV 訳)

「あなたがたは心を騒がせてはならない。神を信じなさい。また、わたしをも信じなさい。」([ヨハネ 14 章 1 節](#) /NIV 訳)

イエスは答えて言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしによらないでは、だれも父のみもとに行くことはできない。」([ヨハネ 14 章 6 節](#) /NIV 訳)

キリストを死者の中からよみがえらせ、栄光をお与えになった方：

キリストの復活と栄光化は、罪に対する主の勝利を二重に証明するものであると同時に、私たち自身に将来与えられる素晴らしい永遠の命を二重に保証するものでもあります。なぜなら、私たちはキリストと一つであり、そのような者として、キリストのからだであり、花嫁である私たちは、永遠に主と同じ運命にあずかることになるからです。

愛する者たちよ、わたしたちはすでに神の子供である。しかし、わたしたちがどうなるかは、まだ明らかにされていない。彼が[栄光のうちに]現れる時、わたしたちは彼のようになることを知っている。なぜなら、彼がまさにありのままの姿であるのを見るからである。([第一ヨハネ 3 章 2 節](#))

そして、キリストが復活し、神の右の座に昇られた後、十字架におけるその犠牲の有効性と勝利を明らかにするために父によって栄光を与えられたのと同じように([詩篇 2 篇 7-8 節](#), [110 篇 1 節](#); [ヘブル 1 章 13 節](#), [12 章 2 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#); [ヨハネ 13 章 31-32 節](#), [17 章 5 節](#); [使徒行伝 2 章 33 節](#); [コロサイ 3 章 1 節](#)参照)、私たちもまた、その栄光にあずかることになります([ローマ 5 章 1-2 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#);

[テトス 2 章 13 節](#))——それは、何か漠然とした、はかなく消え去るような存在ではなく、完全で朽ちることのないからだを持ち、愛する救い主の御前で永遠に生きる、確かな実体を伴う祝福された永遠の命なのです。

(17) もしわたしたちが子供であるなら、相続人でもある。神の相続人であり、キリストと共同の相続人なのである。もしキリストと共に苦しむなら、それはまた、キリストと共に栄光を受けるためである。(18) わたしは、現在の苦しみは、わたしたちのうちに現されようとしている栄光と比べるに足りないと思う。[\(ローマ 8 章 17-18 節\)](#) /NIV 訳)

その結果、あなたがたは神に信仰と希望を持っている：

キリストの第一の来臨、私たちのための主の霊的な死、そしてそれに続く復活、昇天、着座の結果として、主を信じた私たちはまた、「神[父]に信仰と希望を持って」います。なぜなら、キリストに信仰を置いた者はだれでも、父にも属しているからです。

「しかし、もしわたしがそれらを行っているのなら、たとえわたしを信じなくても、そのわざを信じなさい。それは、父がわたしのうちにおられ、わたしが父のうちにいることを、あなたがたが知り、理解するためである。」([ヨハネ 10 章 38 節](#) /NIV 訳)

イエスは答えられた、「ピリポよ、こんなに長い間あなたがたと一緒にいるのに、まだわたしを知らないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうしてあなたは、『わたしたちに父を見せてください』と言うのか。」([ヨハネ 14 章 9 節](#) /NIV 訳)

父ご自身があなたがたを愛しておられる。それは、あなたがたがわたしを愛し、わたしが父から出て来たことを信じたからである。[\(ヨハネ 16 章 27 節\)](#) /NASB 訳)

この結びの言葉によって、ペテロは救いの過程を一巡して出発点に戻り、私たちが主に対する信仰によってキリストに属しているだけでなく、父にも属していることを改めて確信させています——なぜなら、父の御心と子の御心との間には、ほんのわずかな隔たりもないからです([ヨハネ 10 章 30 節](#))。したがって、神の子供であり、父と子の双方から等しく愛されている私たちは、御子に対してだけでなく父に対しても信仰を持ち、愛する主イエスに対してだけでなく父に対しても希望を抱いています。そして、天

において父と子のお二方とともにいる時を、さらに歴史が終わった後には、新しい地においてお二方とともにいる時を待ち望んでいるのです。父とその御子、私たちの主イエス・キリストに愛されている息子、娘として自分たちの救いを確信し、また、私たちの内に住まわせるために主が遣わしてくださった御霊に満たされている私たちには、この御言葉の箇所ではペテロが勧めているように、聖められた生活を送るようにとの呼びかけに応えるための、あらゆる励ましを与えられています。私たちの永遠の行く末は、恵みにより信仰を通して、主にあって確かなものとなっています。ですから、どのような反対や苦しみに直面しようとも、主が私たちのためにしてくださったことを覚え、私たちの救い主が望まれるようにクリスチャンとしての生涯を生きるという課題に応えるため、あらゆる努力を尽くそうではありませんか。それによって、愛する主イエス・キリストに栄光がありますように。

(1) こういうわけで、わたしたちも[ヘブル 11 章の信者たちと同じように]、これほど大勢の証人たち[人間と天使の双方]に取り囲まれているのだから、いっさいの妨げ——特に、いつも私たちにつきまとう罪——を捨て、わたしたちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り抜こうではないか。信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向けよう。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架の恥をもものともせず、それを意に介することなく耐え忍び、神の御座の右に着座された。(3) 罪人たちの手によってご自身に向けられた、あれほど激しい反抗を耐え忍ばれた方のことを心に留めなさい。それは、あなたがたが心に疲れ果て、あきらめてしまわないためである。(ヘブル 12 章 1-3 節)